

平成 15 年度 特別講演会報告書

大阪：地域再生の途—発想を転換しよう

2003 年 7 月 15 日開催
大阪都市経済調査会

はじめに

この冊子は、大阪都市経済調査会の講演会・研究会事業の一つとして、下記のとおり開催した特別講演会における議論の内容を、講師の田口先生のご了解の上、取りまとめたものです。

ご多忙中にもかかわらず、講師をお引き受けいただきました田口先生に心から感謝申し上げます次第です。

2003年11月
大阪都市経済調査会

.....

大阪都市経済調査会 特別講演会

日時 2003年7月15日（火）午後3:00～午後5:00

場所 大阪産業創造館6階 会議室E

テーマ 「大阪：地域再生の途一発想を転換しよう」

講師 田口 芳明 氏（大阪市立大学名誉教授・奈良産業大学経済学部教授）

目次

1. 講師プロフィール	1
2. 講演『大阪：地域再生の途－発想を転換しよう』	3
1. 成熟がもたらした大阪病	4
成熟化はどのように進んできたか	4
初老の体に鞭を当てた 1960 年代	4
オイルショックは分水嶺だった	4
80 年代に味わった地方化の悲哀	5
三段底は人材枯渇と共にやってくる	5
関西は新産業群と「社会的実験システム」のゆりかごに最適	6
2. 夢を与える都市大阪が持っていたソフト・インフラよふたび	8
町の鉄工所はどのようにして生まれたか	8
暖簾分けにみる日本型、顧客ファイルを持って独立する欧米型	8
昔、実業学校が大阪の経済を支えた	9
大阪のうどん屋開業のサポートシステムと讃岐うどんの東上現象	10
大阪は面倒見の良さが身上：育ててモトとするシステムを	10
3. もう一度大阪経済をアジアが救う：更なる開国のすすめ	12
ある個人的な回想	12
いま大阪港がにぎわっている	12
輸出も減らない 7 大港中の優等生：アジア工業化のインパクト？	13
何故真っ先に関西の空洞化が起こったか。マイナスだけに終わらせないために	13
人でつながるアジアと関西：これぞアジア的スタイル	14
急を要するアジア人材の確保：2003 年度通商白書と朝日新聞社説	15
日本の観光：豊富に見せる名所づくりを	16
アジア地域の日本ブームを真剣に研究すべき。商機は無数に	17
アジアと共に、国としてではなく都市として生きる覚悟を	18
4. 都市の構造を多核心に組み替える時期が来た	21
梅田駅北地区コンペが志峻する次世代都心像。都市は何を創造出来るか	21
西部臨海はお荷物なのか夢の舞台なのか：テクノポート大阪計画の「新都心」論の弱さ	22
このままではコスモスクエアは西部臨海地区の中核にはなれない	24
「南北軸」「東西軸」の発想を超えて大阪市は多核心の都市としての発展を	24
いま周辺区に新しい危機が：個性豊かで自立性を持った都市地域に戻るべきとき	26
5. おわりに	28
構造的課題を解決するうえで、我々はさまざまなストックに恵まれ、時間もある	28
緊急の課題は雇用と市場の創出：当面はこれに集中すべき	28
3. 質疑応答	30
4. 特別講演会レジュメ	33

1. 講師プロフィール

田口 芳明（たぐち よしあき）

【経歴】

- 1957年 神戸大学経済学部卒業
- 1962年 大阪市立大学経済学研究科博士課程修了
- 1962年 大阪市立大学経済学研究所助手、以後講師、助教授を経て、
- 1981年 大阪市立大学経済研究所教授
- 1986～87年 大阪市立大学経済研究所長、
- 1995～99年 大阪府立産業開発研究所長など歴任。
- 現在 大阪市立大学名誉教授ならびに奈良産業大学教授。

【活動内容】

大都市の将来に関心を抱き研究を続けている。大阪市総合計画審議会委員、大阪商工会議所産業政策委員会副委員長などとして実際の都市政策や地域経済に関する研究や提言に携わってきた経歴をもつ。この数年都市と観光の関係に興味を持ち、大阪府、大阪市、堺市、関西空港周辺地域などの観光基本計画の作成にも協力している。

2. 講演『大阪：地域再生の途－発想を転換しよう』

お手許のレジюме（特別講演会レジюме：p 33）を参照していただきながら聞いていただければと思います。

大阪の現在の不況については、いちいちデータを並べてご紹介するまでもなく、皆さまご存じかと思しますので、改めてこれを細かにお話することは貴重な時間の無駄になると思います。大阪、もしくは関西の経済を立て直すために重要なのは新しい産業の導入であるとか、新しい機能の育成であるというような提案が相次いでいます。それぞれ違いはあっても、大きく括れば共通したものが見えてきているし、それに対する取り組みも軌道に乗り始めている。現在の全体状況とそれに対して産業的あるいは経済政策的にどう手当てをしていけばいいかという点についてのコンセンサスが出来てきていると見なして、なおその上で私に何かできることはないかと考えたわけでございます。

第一番目は、現状認識についてももう少し中長期、あるいは長々期的な視点からもう一度見る必要はないのか、ということについてです。分かっていることだとおっしゃる方も多いと思いますし、「釈迦に説法」のきらいも無きにしも在らずですが、もう一度それを私なりに整理してみたいと思います。

次に、処方箋としてかなり揃ってきているが、本当にそれが効果を発揮するのかどうかという点には疑いがあるという問題を最初にお話します。また、関西経済についてはそのいろんな施策や新産業政策を導入しても空回りになるということが従来からかなり目立っているわけですが、そこに何とか歯止めをかけることが必要なのではないかと。そういう搦め手から私は問題を提起したいと思うわけです。そういったことがレジюмеの2番目、3番目、4番目の問題提起です。5番目はもう締めくくりにようなものですが、田口の個人的な見解だということでお受け止めいただければと思います。

1. 成熟がもたらした大阪病

成熟化はどのように進んできたか

レジュメでは「成熟がもたらした大阪病」というショッキングな言い方をしましたが、私は 30 数年、関西経済あるいは大阪経済の実証分析をはじめとして、政策研究あるいは政策提言の分野でいろいろ仕事をさせていただきました。そして、その過程で同じことを言い続けているわけです。しかし事態は疑いもなく次々と局面を変えてきているので、成熟化というものを捉えるにしても、それが一体どういうプロセスを経て、今どこまで来ているのかという認識が非常に大事なのではないかと思えます。もう停滞の極みであるとか成熟のどん詰まりであるとか、そういうことから新しい方向はなかなか見えない。やはり現在の事態というのは理由があっただけでこうなっている。ちゃんとプロセスを経てこうなっているということを知ることから仕事を始めるべきではないかと思っております。

初老の体に鞭を当てた 1960 年代

今の大阪の停滞化というか成熟化については、この数十年の間で大きな 3 つの節目があったと考えています。最初の節目は 1973 年のオイルショックです。1960 年代、全国的に重化学工業化を軸として、「超」と言ってもいいぐらいの高度成長があり、(あまり知られていないが)大阪府域での工業出荷額の増加量が全国一という順風満帆の時期があった。戦争、敗戦があり、そして戦後の復興に忙しい 10 年があったものですからそれが隠れていたわけですが、60 年代にもう一度全速で走った時期があった。比喩的に言えば初老段階にもう一度鞭を当てたわけです。

オイルショックは分水嶺だった

最も大きな工業生産の伸びを記録できたというのには理由があります。もともとハード面でもソフト面でもかなり優れたインフラがこの地域にはあり、そこに新しい技術革新の波が来たのです。だから、この地域がその波に一番早く完璧に乗れたことについては何の不思議もないわけです。それが良かったのかというとそうではなくて、それが証拠に 70 年前後から減速が始まった。ちょうど千里万博の時期がいわば宴の極みで、73 年には、はっきりとオイルショックのダメージを受けたのです。データの的にも、これが一つの転機だったことは

つきりしています。いろんな成長率の格差や、失業率等のデータが表すように、明らかにこの時期、関西圏または大阪圏は全国の主要地域の中で最も早く走ったグループから脱落していった。北海道や九州などが停滞していたので、どん尻ではなかったけれど、やはり首都圏あるいは中部圏に比べると遥かに下になり、その他の地方圏の中である程度実力のあるところに比べても成長率が落ちた。そして失業率は上昇していき、70年代には失業率が全国諸地域中で3番目という段階に入り込んだ。

実はこの70年代のオイルショックからの立ち直りが、地域別に見れば以後の明暗を分けた一つの折返し点、ターニングポイントだった。各地域がその後必死になって省エネ、軽薄短小化に努め、ハイテク・ハイタッチ産業への注力などをした中で、大阪は息切れを起こした。失業率の高さはそれを象徴していると思うわけです。

80年代に味わった地方化の悲哀

その次の転機は80年代です。80年代になり新たな成長の波がやってきて、日本経済が立ち直っていった中で、少し遅れをとった大阪が歴然とした地域経済の姿を露呈させ始めた。この頃から一極集中が始まっていたのですが、大都市地域が相当有利な地位にあるという基本パターンはまだ崩れてはいませんでした。しかしそれまでの3大都市圏横並びという特徴的な集中構造は崩れ、中枢管理機能や情報の東京一極集中、国際金融センター化などが進んでいった。ちょうど1985年ですが、大阪市では現在の総合計画21の改定に取りかかる直前の段階で、国土庁あたりから大阪圏に関する基本見解のようなものが提示されてきた。大阪圏あるいは関西圏が地方経済化しつつあるという認識が中央から示されてきた、大変ショッキングなメッセージだったわけです。もちろん反発もありましたし、その間に四全総を巡るゴタゴタもございました。そして国土庁は経済首都的な地位はもう東京に譲るということで、関西は文化首都というようなことを言ってまいりまして、関西からはそれに対して猛反発が出たこともあった。しかし、少なくとも人口集中の面から見て、一極集中は疑いのない流れとなったわけです。

三段底は人材枯渇と共にやってくる

3番目の転機がバブル崩壊です。80年代後半というのはバブルにつながる上昇気流に乗っている時期でしたので、構造的な欠陥が一時少し退くこともあって、素材産業も息を吹き返

した。しかしそれがバブル崩壊と共に以前よりひどく落とされたのです。実は不動産バブルは首都圏より関西圏の方がひどく、大都市中心のバブル崩壊が大阪圏には一番ひどい形で襲いかかったのです。これが3つ目のターニングポイントだったと見ています。

また、一極集中が起こったことの意味はあまり論じられていないが、情報、資金、人口の集中などが色々ある中で、一番恐ろしいのは人材の集中が起こったことです。トップレベルのディビジョンメーカーの方々だけではなく、それを取り巻くバックオフィスの人員であるとかミドル・マネジメントも含めた幅広い人材の一極集中、ある意味の頭脳流出が起きたということが地域経済にとって一番深刻であったと思うわけです。

関西は新産業群と「社会的実験システム」のゆりかごに最適

しかしながら、今日言われる新産業育成の成長のポテンシャルを持っているのはどの地域かとなったときに、関西圏は他のあらゆる圏域よりも勝っている。首都圏とは違う面で競争をしなければいけないと思うが、他の地域とは全く違ったポテンシャルを関西圏が持っていることは、よく承認されています。例えば産業の複合的な構成や、連峰型の産業スカイライン、あるいは次世代型の産業のシーズを持っている。また、その他の新しいハイテク分野についても、環境、バイオ、あるいはロボットなど、そういう新しい産業の芽が関西圏に最も豊富に揃っている。研究面のポテンシャルが経済実力面よりも豊富に揃っていることも十分知られています。また、これからの産業、例えばリサイクル産業や福祉産業、教育を含めた文化産業、健康あるいは病気の予防と結びついた医学・医療方面などは、全て産業の内部だけで処理できないものです。広い意味で社会的、実験システム的な試みと連動しないとうまく働かない。こういった新産業・新分野も関西では非常にポテンシャルが大きいと言われている。

伝統や、それを市場に結びつける販路開拓力も、今なお強力なものが残っています。また、新しい産業・分野を切り開く上で非常に大事な文化力あるいはデザイン力といったものも、千年の歴史に培われた関西独特の伝統を持っているので、ポテンシャルはあると思います。しかしそれが成長に結びつけられるかどうか、ここが一番の問題だろうと思うわけです。特に70年代以降、「物の始まり皆堺」というのと同じように、主なものの始まりはみんな関西で、ニュービジネス・ニューサービスに類するものかなりの部分が関西発であった。しか

し、それが地域経済を支える強力な地盤になっていったかというところではなく、ある時点からそれが域外流出を起こしている。全国化することはいいことだが、それが結実してこない。「起こりはここだが外で発展してしまう」という傾向が、当時のいわゆる生活文化産業という問題提起があった時期にも、しばしば指摘されていたわけです。エンターテインメントや文化の領域で言っても、ジャズ文化もそうだし、ゴルフもアメフトもサッカーも、今日広まっているもののほとんど全てが関西発のものです。生活文化を彩るいろんな産業も、関西発と言えるものが多い。

しかし、これが地域にとって今も大きな肥やしになっているのかというと、必ずしもそうではない。関西発の産業でさえも新しい事を仕掛けるとすれば、関西以外のほうが有利だという状況がしばしば出てくる。問題は何が拡散をもたらしてしまうのかということであり、この地域で生まれた物をこの地域で育てられるかどうかということです。「この地域だけ」という排他的な言い方はしませんが、ここで十分に育てられるかどうか。つまり、この地域の人材育成力とか起業力であるとか、あるいは市場開拓力といったものがどうも弱まってしまったということが問題なのではないかと思う。それは、新産業分野の議論云々ということとは別の次元の問題です。それを取り巻くバックグラウンドについて自戒しなければいけないのではないかと考えています。それが今日のメインテーマと書いていいと思います。

2. 夢を与える都市大阪が持っていたソフト・インフラよふたび

町の鉄工所はどのようにして生まれたか

2番目は、人を育てたり、企業や事業を興す力をどうして作るかということです。これぞ結論ということを書き上げる力は私にはないが、お話できる限りのことは、この際ヒントとしてお話ししておきたいと思います。

このあいだまで仕事をさせていただいたのですが、大阪府立産業開発研究所という実態調査と実証研究を元に産業問題を論じる最も古い伝統を持った研究所があります。私もその責任者をやりながらその全部をちゃんと見ることは出来なかったが、ここには膨大な研究・実態調査の蓄積があります。ここ以外でも昔からいわゆる「新規開業調査」という、今は国民金融公庫などがやっているような開業調査をしていた。私自身そういう調査もやりましたし、勉強させていただくことも多かった。その中に何十年を経て今でも印象に残っている調査結果があります。それはこの大阪には非常によく出来た、あるいは安定した企業を興すシステムがあったということです。

暖簾分けにみる日本型、顧客ファイルを持って独立する欧米型

それらの調査で共通しているのは、中小企業に務めて企業を興す人の経験年数は10年前後に集中していたことです。高等学校を出て10年前後ですから30代前後ですね。40代でも50代でもなく、定年前でもない。あるいは卒業後いきなりでもない。やはり10年前後の経験を積み、技能を積み、信用を得て、そして一定の金融的な信用力をつけた上で起業していた。また、そういう創業する人たちを支えるシステムがあった。

ものづくりの分野では、当時、貸工場や中古機械の市場など、少ない資金で事業をスタートさせる環境が、他の地域と比べて大阪では非常に丁寧に作られていた。工場を借り、中古機械からスタートというように、必要最小限のところだけ揃えば後はウデ次第、信用次第で順調に発展していける土壌がこの地域にはあったわけです。

商売のほうでは昔から言われる「暖簾分け」というがあります。時代劇に出てくるような江戸時代の旧家ということでもなく、「暖簾分け」という習慣というか、ものの考え方というものがかなり広くあった。

例えば欧米では、独立開業するセールスマンの最大の財産は持ち出した顧客名簿だと言う

んですね。そういう考え方も日本にあることは確かですが、そういうドライな関係は主流にはなり難かった。やはり主人との関係で人間関係をうまく保ちながら新しい分野に乗り出していくというような形の、広い意味の「暖簾分け」が日本的な形として長らく存在してきた。

こういった企業の中から従業員が独立して外に出ていくという形は、中国系の企業の広がり方とはまた若干違うところがあります。中国ではご存じのとおり同族的なつながりを非常に重視しますが、日本では血縁関係ではない暖簾分けがあり、場合によっては番頭さんが入り婿になって企業を継いだりした。同族的なものから、より社会的な企業にと切り替わっていったのです。ある意味で周りとのコンセンサスを大事にし、ネットワークを大事にしながら安全で確実な道を探して、新しい企業を興していくというシステムがあった。これが未来永劫日本型だと言うつもりはないが、そういう特色があったということは重要だと思います。

それから先ほどお話した、ものづくり企業の独立のビヘイビアも考え合わせていただくと、やはり日本における企業システムというのは我々独自に考えていかなくてはいけないと思います。シリコンバレーモデルなどといわれますが、日本の場合、アメリカと違って「何度失敗してもいいよ」という風土ではないし、日本で仕事をする場合に人間関係、あるいは社会的なつながりが非常に大事だということが認識できます。そういう意味で、新しい道筋を見つけるべきではないかということです。

昔、実業学校が大阪の経済を支えた

かつて大阪市立大学にいた時に、昭和に入ってから60年間を回顧した統計資料集を作ろうということになり、学校システムの部分について担当しました。その折りに昭和の60年間の資料を掘り起こしてみてもびっくりしたのは、大阪には古い暖簾分けのシステムや独立開業の町工場型システムだけでなく、学校での人材育成をも含む、新しい領域へ入り込むための道筋が豊富にあり、またそれらが利用されていたということでした。

大阪は明治時代に日本最初の工業学校を作ったわけですが、やはり大正末期から昭和の初めにかけて、各地に工業学校や商業学校が出来ました。現在中央区の区役所が建っている所は元大阪市立の商業学校の跡地だと思いますが、船場にそういった学校が出来、周辺部には優れた工業学校が出来た。その卒業生達が一時代前の大阪経済の屋台骨を支えた。船場のボンボンだけがそこへ通ったわけでも、工業学校に入るのはこの地域の人たちだけだったとい

う訳でもなくて、かなり周辺から人を引き寄せていたということが分かっています。

大阪のうどん屋開業のサポートシステムと讃岐うどんの東上現象

先日たまたまカーラジオを聞いていると「うどん屋開業」の話があった。大阪麺工業協同組合、いまでもあるのかどうかは確かめていないが、その開業支援システムの話がすごい。麺の仕入れ方やダシの取り方からお客のあしらい方など全て伝授していくわけですが、最後につきっきりのマンツーマンで店舗探しに付き合うんですね。これが大阪のうどん屋の全部とは言えないかもしれないが、それがれっきとした力を持っているというのはすごいなと思いました。通常、新規開業のお手伝いというのは、「そこそこ援助はするが後は自分の責任で」というものだと思います。しかし一見繁盛しそうな店の出物があっても、間違いないかどうかはベテランしか判断できないことなんですね。

先ほどの鉄工所の開業も同じですが、非常に丁寧で確実性を重視した企業・事業のスタートシステムというものがあったということです。最近、それがうまく働いているのかどうか分かりませんが、うどん屋やラーメン屋などの、飛び込みで弟子入りしたいという人が絶えず出てくる業界では、今も何らかの形でそういうことが行われているのだと思う。

そして今、讃岐うどんが全国制覇を仕掛けています。四国を足場にした、元の素朴な讃岐うどんより手の込んだもので、相当の改善がなされた全国進出、東京進出だったというように見ているが、いずれにしろ新しい有力企業の介添えを経て東京、そして全国進出に成功している。従来とは違う一つの企業のシステムが出てきたのだなど、考えを新たにしているところでは。

大阪は面倒見の良さが身上：育ててモトとするシステムを

いずれにしろ、かつて大阪には各分野で非常に面倒見のいい企業・事業支援のシステムがありました。今でもそのシステムはあるということですが、問題はそれではまだ元が取れないということです。以前は、例えば卸屋さんも非常に面倒見がよかった。店の新しい分野の進出には卸さんが付きっきりで商品の供給から店舗の開設から、あるいはお金の面倒から、挙げ句の果てはお嫁さんまで世話するというぐらい、面倒見のいい卸さんが多かったわけです。しかもそれでちゃんと元は取れていた。しかし現在の多様化した企業支援では、元は充分に取れていない。銭金の勘定から始めろというつもりはないが、やはりそこが一つの大

事な要素だろうと思うわけです。アメリカ的に株式投資から直接金融で支援するというシステムでいくと、ベンチャー企業を作り、株価が上がって、そこから回収するという非常に単純明快なルートがあるわけですが、日本ではそういうふうに行かない部分がある。この数年、経済産業省のコーディネート活動支援事業を、その立ち上げからお手伝いしているのですが、国内でコーディネーター的な機能を果たしている機関を見ても、社会サービス、出血サービスというような域をまだ超えていない部分がかかなりある。そういうわけで、念の入った企業支援と同時に、やはり経済的に成り立つような支援システムを作り上げるのが非常に大事なことではないかと思っています。

3. もう一度大阪経済をアジアが救う：更なる開国のすすめ

ある個人的な回想

次にアジアですが、この頃大阪経済、もしくは関西経済がアジア重視だということが言われています。いまアジアとのつながりが広がってきているが、それでも地域としての対アジア戦略には、主体的な構え方がまだまだ弱いというように感じます。戦前をある程度見てきている人間は、日本にとってのアジアや関西にとっての東アジアとはどんなものであったかを鮮やかに覚えている。私は当時神戸に住んでおり、養父は本社が大連にある大連汽船という貨物輸送の会社で働いていたので、大連と神戸とを行き来していた。当時大連や台北、基隆（キールン）といったところは海外ではあったが国内も同じだったんですね。だから感覚的には非常に近いものであった。もちろん今に比べれば船足は遅く、せいぜい10ノット前後の貨物船で、日数もかなりかかったわけです。それでもちょうど瀬戸内海を往復するフェリーと同じような感覚で東シナ海を往復していた。だから夏休みになると、大連の親戚とか知り合いの子供たちが1人で船に乗って神戸へ遊びにやってきました。修学旅行も大連まで船で渡り、そこから中国のいろんな所を見て歩くというのが非常に多かった。大人だけでなく子供もしょっちゅう行き来するという、非常に近い関係でした。

いま大阪港がにぎわっている

大阪のアジア関係の話に入りたいと思いますが、その前にちょっと大阪港についての話をしたいと思います。大阪港のお仕事をお手伝いしている関係で、いろんな情報をいただくことが多いのですが、実はいま大阪港では非常に面白いことが起こっています。大阪港は貨物の取扱い量は神戸に比べるとかなり少ないが、その振る舞いというのは非常に面白い。最近のご承知のとおり日本全体として輸入が主になってきている中で、輸入額の伸びが非常に高いという点で大阪港は健闘しています。最新の公表されているデータで平成12年から13年を見ると輸入量の伸びが7大港中（東京、横浜、清水、名古屋、四日市、神戸、大阪）最大であるということです。他の6大港いずれも輸出が減っているなかで、大阪港は若干伸ばしている。大阪港の中でも専用埠頭化しているところは簡単には変わらないが、大阪市営の埠頭があり、上屋がある公共埠頭は比較的小さなバラ積みも入るし中小のコンテナ船も入ります。ここの埠頭がたいへん賑わっていて、特に中国船で引きも切らずという状態になってい

る。さすがに最近一年ほどの間は経済不況の関係があり、アジア経済の一頓挫ということもあって、ちょっと中だるみしているようですが、基調的に言えばやはりそういう状況が続いている。東京港も同じく大都市港湾として非常に活況を呈している。神戸よりも大阪、横浜よりも東京港が最近は元気だということです。

輸出も減らない7大港中の優等生：アジア工業化のインパクト？

東京港の場合には対北米貿易で元気だということで、アジア関係では輸出入額全体の3分の1強ぐらいです。これに対して大阪港は約半分が対アジアということで、明らかに方向が違っている。差は広がってきているということですね。東京港では携帯電話などの電子部品等の輸出や、北米輸出が増えているなど、いろんなことを聞かされています。大阪港はどうかというと、従来は製品輸入で伸びていたが輸出はあまりなくて、「帰りのコンテナに何を詰めようか？」といった感じだった。仕方ないので古タイヤや自動車の中古部品を運んだりしていたが、最近は電気あるいは機械系の製品の伸びが一番目立っていて、輸出増もそれに絡んだものが多いのだろうと理解している。やっとなアジアのハイテク工業化と日本の工業品輸出が連動し始めたという、一つのサインがここ大阪で見られるようになったことに注目すべきだと思います。

何故真っ先に関西の空洞化が起こったか。マイナスだけに終わらせないために

先ほど戦前の個人的なお話もしましたが、実は大阪とアジアとのつながりというのは、戦後もかなり深いものがあります。現在商工会議所やジェトロなどでお仕事しておられる方、その先輩の方々というのはみなアジア駐在を長年務めてこられた方が多い。そしてアジアに日本企業を中心とした日本人商工会議所もいくつかあるが、例えばバンコクにしてもシンガポールにしても、それらを運営しているのは大阪商工会議所の方なんです。人的には直結しているということです。

それはプラスにも作用するしマイナスにも作用するというのを次に申し上げたい。私もアジア関連のことをいくつか調査していて、「やはり大阪はこうなんだな」と印象深かったのは、全国に先駆けて一番最初に製品輸入を本格化させたのは阪神地域だったということです。中間製品や完成品の輸入が多くなり、アジア貿易が活況を呈してきた、面白いなと思っていたら、そのすぐ後、80年代後半から90年前後にかけて今度は直接投資を始めたわけで

す。それも大企業、中堅企業だけではなく、関西の場合には中小企業が直接投資を始めた。これもすごいなと思って見ていた。しかし、それにすぐ続いて起こったのが例の空洞化現象です。製品輸入でもある程度ボディーブローが効いているところへ、直接投資で企業が移ってしまうということになると、関西の経済、産業の空洞化率が日本一になったというのも、また避けられないことであつたわけです。

問題は、せつかくアジアシフトを先駆けながら、そのために自分自身の空洞化、過疎化を引き起こしてしまったところにあるのだと思います。当然の結果のように考えられますが、しかし空洞化を起こさないですむコースもあり得たのではないかと思うのです。大阪港の事例を申し上げましたのはそういう意味でありまして、空洞化の中で僅かではありますが、アジアとのつながりのプラス面が表れ始めたということです。それが日本のものづくり機能とアジアのハイテク工業化との連動を始める、一つのきっかけになればという思いでご紹介したわけです。

人でつながるアジアと関西：これぞアジア的スタイル

これから先も関西経済のアジアシフトというのは続くと思う。なぜかと言われると、きれいな説明をすることはなかなか難しいが、長短さまざまな原因が重なっているのだと思います。

一つにはやはりこれから先も続くのファクターの1つとして、人的なつながりということがある。先ほど日本人商工会議所の話をしたが、要するに関西で仕事をしておられる方で、アジアとの人脈を持っておられる方が非常に多いということです。これは全国一だと思う。それがアジアに関しては効くということなんですね。近代化した暁にも、あくまでも人的なつながりでしか商売出来ないのかと言われると、それでは困るし、やはり貿易システムや法治国家的なシステムというものが整ってこないといけないと思います。しかし欧米と比べると、対アジアに関しては、国際貿易あるいは対外投資という非常にリスクな分野では、制度がある程度あってもやはり最初に大事になるのが人的な信用なのです。そういう無形財産というようなものを関西は持っている。かつてアジアを股にかけて活躍していた人材もだんだん年老いていっているわけですが、しかし今だにそれが受け継がれて、現在でも関西は人脈日本一だということは明らかだと思う。いくらハイテク工業化をやると言っても、その場

合のきっかけは人間であり、これからの直接投資の世界でもやはりそれは疑いないことだ
と思う。

急を要するアジア人材の確保：2003 年度通商白書と朝日新聞社説

もう一つは人材の問題。優秀な人材という分野に注目したい。もちろんアジア人材ということになると、それ以外の一般技能職的な人材も非常に大事であるし無視するわけではないが、今日は時間の関係もあってそれはちょっと脇におかせていただきたい。やはり高学歴あるいは高技能・専門技能を持っている優秀な人材は、グローバルな国際共通材的な性格を持っています。私も数多くないとは言え、いろんな大学とお付き合いさせていただいた中で、教師稼業とはなんと有り難いものだと思います。外国へ出かけて行っていろんな所へ入り込むのに難しいことを一切言われたいんです。手紙1本で行ける。もちろんお金が絡むときはそれなりの準備は必要ですが、それさえクリアすれば難しいことは何もない。もっとも研究開発になると特許が絡み、いろんな難しいことがその上に重なってくると思うが、しかし基本的に人材の移動ということに対して、全くグローバルな世界であります。

世界の工業化あるいは先端技術化の中で、世界でも数が限られている優秀な人材をどれだけ囲い込めるかということで競争力は決まるといわれています。よく言われることですが、シリコンバレーはアメリカ人によって動いているのではない。今ではアジアが動かしている。これは名簿を見てもよく分かるのですが、インドと中国系の人々が動かしているのです。

日本人の人口1億3千万足らず、世界人口60億の約50分の1ですね。ところがGDPでいくと、日本はざっと世界経済の1割を動かしている。ODAになるともっと大きいわけです。1割ないしそれ以上のシェアを持った経済を数十分の1の人口だけで切り回すというのは、何がなんでも無理があるのではないかと。今やハイテク分野の優秀な人材は国際共通材的に扱われている。これをどれだけ囲い込めるかで競争力を決定していくとすれば、日本はこのところで自分の手足を縛るということを今だにやっている。特に関西経済なり大阪経済というのは、ある意味で昔からアジア経済の中に組み込まれている経済システムですから、外からはそのように見ているわけですね。中国などでもそうですが、留学生の半分は現地に留まるのが普通なんですね。アメリカでも同じことで、日本へ来ても半分は留まろうとする。その必死な努力を日本はにべもなく断っているというところがあって、私自身、留学生に関

西で何とか仕事をさせてあげたいと思って努力したが、いろんなところで頭を打ったという苦い思い出があります。その恨みで申しているわけではないが、非常におかしいと思います。

先週、2003年度の通商白書が発表されましたが、国際人材の確保にもっと力を入れようというのが一つのメインテーマで、テレビ報道でもそれが主に報道されていたと思います。朝日新聞が社説でこれに反応されたが、その中身にちょっと心配なことがありました。そういう優秀な人材の国際化も自由化も大事だが、今や一般技能職的なアジア人材の問題も待てないというのです。だから両方一緒に議論しなければならないという論調だった。一般技能職的なものでの外国人労働者をもっと多用すべしという議論は反対ではないが、しかしそれとこれとはちょっと次元が違うと思う。それだけで外国人に垣根を高くするというわけにはいかないが、今、日本はこれだけの高失業率があり、しかも国内の労働力資源を活用することに対してまだ無策であるという状態です。私自身奈良のある大学の就職部長をやっていて、学生諸君のお世話をしているが、実は就職の意欲を持たない若者がものすごく増えてきている。これに対して我々がなかなかうまく手を打てないのは自分たちの責任だということで、非常に深刻に考えているのですが、若者の高失業率が一般化しようとしているというこの時期に、国内的にそこを何とかするシステムを全然作動させないで、外から入れるだけというのはないだろうと思うので、その議論は別にしなければいけないと思う。女性、高齢者、障害者の就労促進についてもまだすべきことがいっぱいある。

要するに今の高い技術を持っている優秀な人材を確保することは急ぐべきだということですね。国内体制がどうこうということは、もう言うべき時期ではないと思っております。そういう意味で、これから先アジアとの付き合い方のなかでも、もう一つの問題はここだろうと思っております。大阪は、あまり中央と喧嘩するのは好きでもないし、得意でもないが、ことこの点に関しては相当な摩擦を覚悟してでも、国際人材あるいは優秀な人材の確保をしっかりとやらないと明日はないだろうと思っているわけです。

日本の観光：豊富に見せる名所づくりを

観光のこともお話したいのですが、ほんのなでるだけにさせていただきたい。ある会員制のホテルチェーンが最近、台湾の方を中心に海外観光客を大量に受け入れておられる。実はこのチェーンは好きで昔からよく使っていたので、よく見聞きしているんですが、SARS

のことで台湾からこられたお医者さんを追跡して予防措置を講じなければいけないと大騒ぎになったことがあります。天の橋立に行つて姫路を経て高松から淡路島へ行って帰つてくるといふ、ものすごく忙しい観光ルートだった。それについてどうこう言うつもりは全然ないが、しかし観光バスでだーつと連れ回されるというのを見ていると、申し訳ない、可哀相だなと、もっといろんなところを見て貰えたらいいのにとかねがね思っていた。いま日本を訪れる外国人観光客の3分の2までがアジア諸国で占められています。これだけ日本に憧れて来てくれている沢山の方が、判でついたような観光ルートだけしか回れず、自分でじっくり日本を楽しんだり味わったりすることがなかなか出来ないのを見ていると、これから先アジアの人たちの身になって、どうすれば日本をもっと楽しんで貰えるかを考えることが非常に大事だろうと思います。

アジア地域の日本ブームを真剣に研究すべき。商機は無数に

東南アジアへ旅行された方は皆さんお気づきだと思いますが、いろんな難しい問題もあり、歴史認識の問題も棘が刺さったみたいに残っています。これも早くなんとかしないとイケないが、他方で非常にナイーブな次元で日本に対する憧れを持っておられる場面にしばしばぶつかるといふ。それは惚れ込みすぎだろうと、こそばゆい思いをすることがあるぐらいです。日本のいろんなミュージシャンが向こうへ行くと日本以上に受入れられる。あるいはテレビドラマや、アニメも受け入れられている。日本のいろんな風俗・ファッションも彼ら彼女らにとって一つの憧れであったりする。街頭に固定カメラを据えて前を通る人を継続的に写すディスプレイがアジアの街角にもあって、六本木を写したりしているわけです。そうすると、向こうの人たちは口を開けてずーつと見ていて、時々ポツツと「あんなにキレイになりたい」とか「なぜ日本の女の子はあんなにキレイなのか」といふ。首をかしげること無きにしも有らずなんです、そう思っておられるのは嘘ではないんですね。

アジアの人たちは我々より歴史が古いから、伝統的なものを持ち出してもあまり通じないだろうとか、向こうは現代的な物を欲しがって日本に来られるのだと割り切っていたが、いまアジアの国々でもハイテク製品は溢れかえっているし、もう近代化が珍しいわけではない。それで日本人の我々としては戸惑っているわけですね。何が受け入れられるのか、彼らの願いが何なのかがよく分からなくなっていると思う。実はそこが大事なところで、抽象的な言

い方ですけれども、我々が持っている沢山のものがユニバーサルな価値を持っていることに我々自身が気づいていない。

アニメは非常に新しいジャンルのメディアですが、ああいうアニメーションはアメリカ産がいくつもあるのに、不思議に日本のものが受け入れられる。なぜかという答えは私にも分かりません。古い話で恐縮ですが、「鉄腕アトム」にしても「ドラえもん」にしても、全部ヒューマニスティックなロボットだという一つの特徴があります。アジアの人から見れば、ある意味で日本は眩しいと同時に遠い存在なんですね。ところが、そこで生まれた非常に新しいものが、実は彼らが日常生活で重んじているいろんな感覚とか規範とかいったものと非常に近い存在だということを見つけると、もうぞっこん惚れ込んでしまう。ドラえもんは失敗ばかりするわけですが、それがいいわけですね。これは私自身も体験があります。アジアから来た研究者が最初緊張しておられるが、日本のことを知ると、日本人って案外迷信深いので安心したというんです。いろんな占いとかまじないとか、そんなことを大事にしているみたいだし、頭の中はコンピュータだけかと思っていたら、そうでもないんだなというんです。向こうの研究者でさえもそう思うぐらいですから、一般の方々はずっと日本人をすごいと思っているわけです。『おしん』が受け入れられたのも同じことだと思うが、そういう我々の世界の中にユニバーサルなものがあるのではないかと思う。ファッションデザインもそうだと思いますし、絵画やデザインの世界だってそうだと思います。日本画といえども日本の伝統を踏まえながらも明治以降に作り出された1つの近代絵画なんですね。これは日本人にしか分からないと思っていたら、最近の日本画の変貌はものすごくいいものがあって、明らかに世界的な通用力を持った一つのジャンルになろうとしている。着物、風俗もみなそうですが、全て我々の持っているものが100年の成熟を経て意外にもユニバーサルな性質を獲得していて、そこがアジアの人たちに通じる接点を広げてきているというようにも思うわけです。ですから、従来の近代的なものか伝統的なものかという二分法ではなくて、観光政策においても、もう一步踏み込んだ市場開拓が必要ではないか、あるいは理解のしてもらい方があるのではないかということです。

アジアと共に、国としてではなく都市として生きる覚悟を

アジア化ということについては以上のようなことで、大阪はアジア的なのだと心から思っ

てしまったほうがいい。最近特に東日本と西日本という二分法ばかりではないが、東と西が同じ波長で同じ位相で重なって動くということがなくなってきました。東には先ほどの 70 年代に一度水をあけられたということがありますが、置いてきぼりを食らったというのではなくて、我々は我々のペースでしか動けないということがいよいよはっきりしてきたのです。これが 1 つです。要するにサイクルが合わなくなってきた時代なんだということです。我々は独自のサイクルを刻めばいい。

もう一つは、地方の時代と言われるが、最近の所得の伸びを 3000 いくつの市町村で地図化すると非常に面白い。3 大都市圏とその周辺がみな上位にくるかというとは全然そんなことはなくて、鹿の子模様とかまだら模様というか、九州でも北海道でも伸びるところは伸びる、近畿で言えば和歌山でも伸びるところは抜群に伸びるということで、非常に小さな単位で鹿の子模様になってきている。画一的にどこそこのモデルを追いかければいいという時代ではなくなった。そういう意味で大阪なり近畿、関西の場合、アジアとのセッティングの仕方は単に貿易とか投資ということだけではなくて、先ほどの人材導入、観光、あるいは研究開発における連動もありと、いろんな意味でアジアとの連動ということをもっと強めるべきだと思う。他の都市のことはどうでもいいと言うとおかしいが、まあ、二次的な問題だと思うわけです。

逆に、日本海や東シナ海を挟んだアジアの国々との距離はどんどん縮まりつつある。これは海と陸の物流上のリンクが出来上がってくるということでもあります。この点についてはコンテナ化の進展というのが非常に大きな役割を果たしているが、その上に各港のいろんな IT 化は進んで来ている。国際的な流通網を IT でもってカバーする。宅急便がやったシステムに近いものを、アジア次元では実現しやすいということなんですね。全域をカバーする必要はなく、主要港同士で十分ということです。特に東アジア貿易に関しては内容的に宅急便化していくことができるという状況です。競争はこれの中で熾烈にはなるが、同時に自分のホームグラウンドというのか、後背地を持った日本の港湾は非常に強いということです。これはシンガポールとも、香港とも違いますし、釜山とも若干違います。そういう意味で、阪神地域というのはアジア貿易に関して非常に有利な条件を持っている。しかもこれから先の管理技術の発展により、1 日経済圏とはなかなか行かないが、「週内経済圏」というのか、

出荷して週内には必ず相手のところに届くというシステムはもう目の前まで迫ってきている。この時代に大阪がその先鞭をつける。先鞭をつけたら、基本的な体質の問題もあって他の地域はなかなか追いかけていくと思う。ここに一つのヒントがあるのではないかと考えている次第です。

4. 都市の構造を多核心に組み替える時期が来た

梅田駅北地区コンペが志峻する次世代都心像。都市は何を創造出来るか

3番目は都市構造の問題。これは非常に問題が大きいので、私もの確な形で問題をお出しする自信がないが、ここはしゃべり散らして終わりということでお許し願います。先日、梅田北地区の国際コンセプトコンペがございました。あれだけのコンペは日本では例がないと思いますが、世界中から応募があって、総数963件。外国からはその約3分の1でした。特徴として3つぐらいあると思いますが、1つは「緑と水」。日常生活の次元でも、我々渴望しているとか飢えているファクターですが、これを都市基幹的なインフラに仕込めないかという試みが非常に多かった。優秀作3点、佳作5点、ほかにも沢山ありましたが、そのほとんどが何らかの形で「緑と水」を提案している。従来の基幹インフラといえば、例えば昭和初年の大阪の基幹インフラは御堂筋だったし、工業化の基幹インフラは運河と水路であったわけですが、それと同じような意味で（21世紀型とまでは全ての人が言っているわけではないが）これからの大阪にとって必要な基幹インフラの構想は「緑と水」をどう組み込むかというわけです。組み込むというと添え物的なものもありうるわけだが、これは半端なものではなくて、「見かけ上は全部緑地にしまえ」とか、「全部水路にしまえ」とか、それぞれにものすごい努力をされた跡があった。都市経営的な次元から見てもインフラとして成り立つものかやってみようということで、全面緑地に見えるが実は人工地盤であったり、あるいは水路で非常にオープンな中心軸を作りながら、ある部分は高密度開発をうまく組み合わせ平均的な容積率を高め、高い土地のもとでも十分採算が取れるようにしよう、等という色んな工夫がありました。確かにベニスやアムステルダムではご存じのとおり水が基幹的なインフラとして今も動いているが、緑が基幹インフラになっているというのはあまりないと思う。セントラルパークも必ずしもそうとは言えないと思う。むしろイギリスに今も残っている初期の田園都市、ウェルウィンとかレッチワースなどは正にパークウェイという緑の公園的なものを都市軸に据えている。その匂いがするのは御堂筋、あるいはシャンゼリゼなんです、そこまで徹底したものは今なかなか残っていない。それをもう一度やろうということで、緑と水が基幹インフラになっていて、しかも採算が取れるという都心はどうだ、という国際的にも非常にユニークな提案が沢山あった。

もう一つは、20世紀の前半までの、特定すればアメリカのビジネス型の都心タイプから、明らかに袂を分かとうというのがはっきりしてきました。オフィスとホテルをちゃんと作れば都心だという形ではなくて、いろんなクリエイティブな機能をどう盛り込むかという、創造型都心というものが見えてきたのです。何をそこで創り出すのか、何をそこで交流させるのかということ非常に明確に意識しておられる。ビジネスとエンターテインメントとショッピングが従来のアメリカ型都心の3点セットですが、ビジネスを除けば、ショッピングもエンターテインメントも全部消費型なんですね。しかし今回コンペの優秀作・佳作の中にはエンターテインメントを正面に押し出しているものやショッピングセンターをどんと持ち込むようなものが非常に少なかった。また、ロボット関連、医療関係、あるいは大学との交流、大学のサテライト的な研究施設や、国際的な交流のための施設など、いろんな文化・学術・生活等々において新しいものを創り出すセンターをここに持ってこようという創造型都心、あるいは生産型都市という性格が非常に目立っていた。そういう意味で言うと、日本で前世紀の後半に我々がやってきたいわゆるビジネス中心型の副都心開発という流れとは明らかに違ってきている。お台場や汐留とも違うし、ことによれば六本木ともだいぶ違って来るだろうと思う。いま言いましたような都市の基幹インフラを何にするかということですが、「緑と水」というのも単に癒しだけではなくて、ある意味でのクリエイティビティを期待しているわけですね。文化的なクリエイティビティを期待して、何かを創り出すための都心、あるいは大事なものをそこでエクスチェンジするための都心だという性格がはっきりしてきました。今の東京の都心再開発と比べても明らかに一步先を行っていたなと思うわけです。実際これをある程度参考にしながら本当の開発を、北地区の再開発をやっていかなければいけない。コンペの提案とそっくり同じものにはならないとは思いますが、ベースになるであろうことは確かですね。そういう意味で言うと、我々は東京に遅れた都市再開発をやる立場になって、かえって良かったなと思うわけです。

西部臨海はお荷物なのか夢の舞台なのか：テクノポート大阪計画の「新都心」論の弱さ

さて、そこで大阪の応用問題ということになってくるが、特に西部臨海地区というかベイエリアの問題と重ねて一つの試論的なことを申し上げたい。10数年前にテクノポート大阪計画を作った時にもお手伝いした経験があるが、その時の舞台裏を申し上げて参考にしていた

だきたいと思います。実はあの時コスモスクエア地区を新都心と称して、それを受け止めて現行の大阪市の総合計画 21 もこれを新都心と命名しているんですね。新都心というのは俗称でどこでも使っているじゃないかと言われればそれはそうですが、しかし当時はもうちょっと真剣な議論をやっていたんです。なぜこれが都心なんだという議論を相当やって、辛うじて出した答えは、現代は高次都市機能がどんどん変わっていく時代だということでした。

20 世紀の早い時期に出来上がった都心は、ビジネスもエンターテインメントもショッピングも高次都市機能全てを抱え込んだオールインワンのものでした。しかし、さすがに半世紀以上を経て収まり切らなくなってきた。例えばインテックス大阪があります。戦後の歴史を見ると、展示場をどこへ持っていかで苦労している。堺筋本町にあった国際ホテルもそのような機能を持っておりまして、大阪市は独自に朝汐橋の八幡屋公園に国際見本市会場を作りました。立派なものを作ったけれども仮設だったので、やはりまた移転して、落ち着いたのが今のインテックス大阪です。あれだけのスケールのもを旧都心部に作るのは無理だというのははっきりしているわけですね。

ですから現在はそういうコンベンションやエキシビションという機能は都心から離れるんだということです。50 年代 60 年代にアメリカの都市がリニューアルの過程で、空港と都心の間にコンベンションセンターとホテルを作って、それで化粧直しをしました。日本もそういう時代に入ってきたんだなと思います。コンベンションだけではなくてそれ以外にも、会議場や研修施設等の本格的なものは旧都心の外に移して行かなければいけないだろうと思うのです。そういう意味でいわゆる高次都市機能が枝分れして、都心型と都心外型に別れつつある。この都心外型を有効立地させる受け皿がいるだろう、それが新都心の役目だということになった。結局形としてはそれをベースとして情報通信と国際交易と技術開発の 3 本柱でテクノポートを作ろうということになったわけです。ですから、新都心と言っても今になって思えば、裏都心みたいなものであった。旧都心が創り出した影が新都心だったという、内幕を言えばそうだったのです。

このままではコスモスクエアは西部臨海地区の中核にはなれない

いまコスモスクエア地区もそうですが、あの近辺の施設は非常な苦境に陥っています。また、新臨海や旧臨海も、鳴かず飛ばずの状態になっていて、どこに出発のきっかけを掴むべきかというところで戸惑いがあります。個別の具体的な知恵もいろいろあるでしょうが、基本的なところから言えば、テクノポート計画という新都心論は不十分であったなということなんです。つまり、都市機能の持つべき求心性というものがそこにはなかったんです。非常に優れた都市インフラが入っている場所であるし、求心性が絶無というわけではないが、しかしいわゆる都心機能として持つべきものが育っていないことは明らかです。そういうところに本当の原因があるのではないかと思います。WTCにしろATCにしろ、あれだけ立派で素晴らしいものを作りながら、その活用に四苦八苦しなればいけないというのはおかしいと思う。景観がどうだという問題を超えて、都市構造としておかしいと思う。ということは、大阪という大きな都市の都心機能の配置のあり方をもう一度考え直さねばならない時に来たのではないかと思います。

「南北軸」「東西軸」の発想を超えて大阪市は多核心の都市としての発展を

私の個人的な見解ですが、やはり北と南を御堂筋で結ぶ昭和初年型の都心構造というのは命脈尽きたとは言わないが、次の段階へ入ろうとしているのではないかと思います。大阪の都心というのはユニークです。他の都市とは全然違って面的に広がっていた商業中心都市域の上に近代型の都心をはめ込んだというものです。ですから、本来 20 世紀型であればもっとコンパクトになるべきだった都心が、縦横十文字に発展した商業地域をベースにしているものですから、非常に大きなものになった。それを強引に南北に結んだのですが、これは明治以前から出来上がっていた都市の構造とはだいぶ違ったものだった。何より東西交通というものが切られましたし、南北交通の軸も千年近い歴史を持っている堺筋をよけて作られました。そういう意味では斬新な都心を一挙に創り出すという非常に意欲的な構想だったと思う。今になって見ると、北地区は先ほどお話ししましたように次の変身を遂げようとしているし、難波地区の開発というのも非常にスケールを広げようとしています。南北にこれだけの大きな再開発をされると、オフィス立地場所としての御堂筋の地位が低下することは避けられないと思う。御堂筋は次の変身を考えなければいけないが、その北と南をしっかりとつな

ぐ都市軸として役に立つのかどうかというのは、また別の話です。

だから大阪は、かつての縦長の単一都心型から北と南の「2つ目小僧」にだんだん変身しつつある。それと同時に、明治30年の築港事業以来やってきた西部開発というのがやっとなりの目を見始めた。単に港を作り工場を作るというだけではなくて、都市機能の上でもう一段高いものを入れられるものが出来上がってきたということなんですね。これは100年の成果だと見ていいと思います。と同時に、西部地域、旧臨海も含めて西部地域には都市機能としてもっとよく組織化された都市域を作らなければいけないという課題が残されていると思う。そういう意味で、コスモスクエアだけではないが、あの地区の負っている使命というのは非常に大きいのではないかと思う。必ずしもこれをキタ、ミナミに並ぶ第三の都心にと申し上げているわけではないのですが、以前の新都心論というのは根拠づけの弱い都心論であったなと思っているわけです。

これから先、大阪はポスト工業化の時代にふさわしい街に進んでいかなければならないと思う。古い話で申し訳ないが、私がかつて知っていた大阪というのはこんなものではなかった。大阪はもっと内容豊かな都市域だったということを申し上げたい。私の生まれは高槻です。阪急京都線の沿線ですが、当時あれは「新京阪」と称していた。「京阪」は古くからあり、それに対して淀川右岸側に作られたものを「新京阪」と称していて、JRは「省線」と称しておった時代です。その新京阪は十三でも梅田でもなく天六へ入っていたわけです。私どもが盆正月等に何かいいものを買って貰えることになった時、どこへ買い物に行くかといえば天六の商店街だった。私の家は戦後も商売をやっていたので高校の頃は大阪へ仕入れにも行かなければいけなかった。卸屋さんはどこだといえば、清水町などの卸屋さんにも行きましたが、天六の周辺にも結構卸さんがあって、そういうところへ仕入れに通ったものでした。そういう意味で、天六はれっきとしたまとまりある一つの都市域だった。後に阪急の京都線は宝塚線と連結されて十三と結びついた。電圧差の調整区間が今でも残っているかと思いますが、後でつないでいるんですね。ですから、明らかに天神橋は独立した街だった。同じようなことが福島についても言えますし、築港とともに栄えていった市岡とか大正のあたりもそうです。もっと南に行けば粉浜もれっきとした街ですし、東で言えば都島や今里も一つの中心でした。平野は後から入ってきた、もっと大きな独立した存在です。また、難波利三さんが書かれた『てんのじ村』にもあるように天王寺というのも明らかに大阪とは異なる

る一つの都市域だった。そういうものが大阪として明治以来囲い込まれていって、それを結合するのに最適の交通手段が市電だったわけです。縦横十文字にゆるやかに結びつける上では最適の交通機関で、戦前の市街地というのは市電のレールが敷かれているところまで、というのが相場であったわけです。それが、どこでどう変わっていったのか話せば長い話になりますが、現状のようにだんだん都心というものが単一都心が変わっていった。1つの都心があってその周辺は住宅地域になるか工業地域になるかどちらかだという発展の仕方は近代工業社会の都市構造の一つの典型だと思います。ところが大阪はついこの間までは、それとは違った都市構造を持っていたということです。

いま周辺区に新しい危機が：個性豊かで自立性を持った都市地域に戻るべきとき

昭和初年頃の近代都市計画を批判するようなことも申しているわけですが、それは本意ではございません。私は今の視点でもってかつての事業を批判するというのは愚かなことだと思っています。歴史的な相対的な距離感でもって分析すべき事柄だろうと思っているので、問題は今の都市についてなんです。今の時代にふさわしい都市に回復していくにはどうしたらいいのか、これはこれから先みんな考えて行かざるを得ない。その一つのきっかけの議論として、西を何とかしようという話なんです。

南北軸はある程度できたが、東西軸は弱いからそれを作るんだという議論があります。しかし都市軸という発想はどうも生産的でないように思うわけです。国土庁の国土軸と似ていて、国土軸はフィジカルな軸なのかメタフィジカルな軸なのか、どちらだと言われたら、あまいに言辞を濁す。大阪の場合はそこまで逃げているわけではないが、交通軸として整備するというので、非常に太い都市軸を東西へ入れました。と同時に東西は文化軸だという位置づけもして、ハード・ソフト両面の東西軸という構想できたわけですが、果たして縦横十文字の都市軸というものだけで、これから先のポスト工業化時代の都市の活力を引きだせるのかどうかというと、それは疑わしいところです。

答えは何も言ってないじゃないかと言われるかもしれないが、まずは緊急の課題である広い西部臨海地区にどうやって活気を注ぎ込むかという中心部からでも始めたらどうなのかということです。例えば、住之江区、大正区の人たちが買い物や日常の楽しみのために今のコスモスクエアへ行くだろうかということなんですね。あるいは尼崎南部とか泉北地区の人

たちが南港地区というものを生活の中心として考えておられるだろうか。答えはノーです。そういう意味で、非常に広い後背地に対して、これの統合の中心になるようなものが今のところは育っていない。バイエリアの開発のメカニズムがおかしかったとか、いろんなことを言われますが、都市の建設の仕方ということから言えば、都市の中心的な機能をどう整えるか、それと同時にそれぞれのコミュニティをどう作り直していくかということが大事なので、そういう面的に広げた形で考えるべきだろうと思います。コスモスクエア問題も三セク問題の次元を超えて、これから先の都市づくりの中であそこをどういうふうに育てていくのかという 100 年の計を早く作るべき時だろうと思っているわけです。

5. おわりに

構造的課題を解決するうえで、我々はさまざまなストックに恵まれ、時間もある

最後は端折りたいと思いますが、実は我々は無から出発しているわけでは決してないということがございます。かつて観光問題で国際シンポジウムみたいなことをやらせていただいた時に、オーストラリアのニューサウスウェルスの観光担当責任者のブラウンさんという方が来られて開口一番言われたことが非常に印象的だった。「なぜあなた方はそんなに危機感を持つのか」と言われたんですね。「大阪ほど綺麗なところはない、これだけ社会資本ストックが揃っていて、また私的にも資本ストックが大量にあって、サービスが整っていて、あと何が必要なのか」と言うのです。実は相当思いつめた状態で、「集客産業を興すことが大阪を再生する一つの道だ」というような議論をしたものですから、ピンと来なかったんですね。でも外から来た人はそうは見えないというんです。70年代のイギリス病云々と言われていた頃に、イギリスから来られた地理関係の研究者からも「どうしてこれがリセッションなのか」と同じようなことを言われた。イギリスに比べたら全然活気の程度が違うと言うのです。「リセッションと言うなら、これはもうゴールデンリセッションだ」と言って帰られたのを覚えています。見かけの問題とはまたちょっと違いますので、必ずしもそれが正しいわけではないが、少なくとも戦後の焼け野原から立ち上がった時とも違いますし、蔵屋敷がなくなった百何十年前とも全く違います。非常に豊富な社会資本ストックとノウハウを持ち、人材もまだ大量に抱えている。しかも今言ったように百年のサイクル、衰退のプロセスだけをとっても50年かけて進んできたプロセスですから、これを何とかするというのは、急ぐ課題ではありますが、10年20年以内に片づけなければいけないことはない。時間はたっぷりあるということです。

緊急の課題は雇用と市場の創出：当面はこれに集中すべき

最後にちょっと付け加えさせていただきたいが、緊急の課題は何かというと、なんといっても雇用と市場の停滞ということです。これは結果であって、構造転換をやらないと出てこない結果じゃないかと言う方もおられるかと思いますが、緊急課題としての雇用、あるいは市場欠陥の課題もございます。何かというと、失業率の高さです。若者の就職の責任を持っているということもあって、よけい深刻なんです。大阪府の失業率の高さはご存じのよう

に最悪です。2002年の就業構造基本調査でいっても8.6%ですか、全国の5.4%に比べて3ポイント以上高い。こんな状態は初めてです。昔から大阪は失業率が高く、先ほど言ったように70年代には0.5%、場合によっては1%ぐらい全国よりも高いという状況でした。90年代に入ってからさらにそれが広がって、1%~1.5%高いという状況になっていたが、最近の2、3年はこれがもっとひどくなって、今の3%という状況です。しかも従来のような中高年失業というのとは違って、非常に深刻な若者の失業率が高くなっています。日本の人材育成のメカニズムの崩壊と言っていいような状態と軌を一にして出てきている失業状態なんですね。部分的にでも手当をして早く食い止めないと大変なことになる。

例えば全国との差の3%、これを縮めるというものすごく控えめな目標を掲げただけでどの位になるかという試算ですが、例えば大阪府下全体で考えれば就業人口480万人、これをざっと500万人としてこれの3%と考えると15万人という数字が出てきます。これは例えば銀行業や建設業、運輸通信業の就業人口の全体規模の半分くらいで、百貨店・スーパーの就業人口に相当する数になります。大阪市分はその半分ということになるので、7万人強となりますが、完全に半分なのかというとやや大阪市内（統計がないのでわからないが）が高めと考えて、8万人から10万人の雇用創出をすると、やっと全国並みの失業率に追いつけるかなということです。

所得の面でも同じようなことが言えるわけで、圏内総生産ざっと40兆円ですが、その3%程度でいけば1.2兆円。阪神タイガースが優勝すればその効果1千億円と言う人がおられるようですが、それでも12分の1ですね。まさか阪神タイガースに毎年優勝してもらうわけには行かないし、やはり非常に大きな雇用創造および市場創出の課題が差し迫っている。そのためにも出来ることは全てやらねばならないほどの緊急事態だと思っております。そういう緊急課題と、先ほど申しました構造的な課題、これを長短うまく組み合わせて、これからの舵取りを皆さんにお願いしたいと思っています。もう時間を全部使い切ってしまうと、お疲れのところ本当に申し訳ございません。以上で終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。（拍手）

3. 質疑応答

司会 田口先生、どうもありがとうございました。質問のある方は挙手願います。

会場 制度論なんですけど、空港のことやスーパー港湾のことを考えても、あるいは通勤圏・生活圏を考えても、京阪神というのは本当に分かれていいのかという問題があります。その流れで最近道州制の問題がものすごく出てきておりますね。それから、大阪の中でも特別市の話と、大阪府との統合の話が出てきているんですが、このへんの制度論についてはどういうふうにお考えになっていますか。

田口 この問題について、ここにおられるKさんがかねがねご研究されているので、そちらから教えていただくのが筋かと思うんですが、私から言わせていただくと、私はどちらかと言えば、広域化賛成論なんです。しかしそれは昔からの市域拡張論に賛成という意味ではありません。戦後になってもある時期までグレーター大阪という考えがありました。それは非常に古い時代の都市化の形を反映したものです。市街化が進んでいるところまでは行政的にカバーすべきという戦前型の都市膨張の姿を制度的にサポートしようという考えを多分に引きずっている。しかし今の都市化というのはそれを遥かに超えているんです。都市地域の広がりから言っても、一体的に処理せねばいけないことがあまりにも多すぎる。しかしだから「道州制にすぐ移行すべきだ」とか「府市合併をすぐやるべきだ」ということになるのかどうか、すぐには賛成しがたいところもあるんです。ですが、急ぐところはあります。一つは港湾ですが、いま起死回生の復活をしようと思えば、これはもう絶対経営的な次元だけでもいいから統合化を図るべきだと思います。

もう1つは経済政策の面ですね。ことに雇用が絡んだ経済政策については、市町村の横の連合ないし府市一体的な取り組みが不可欠だと思っております。国の制度の関係もあって、大阪市はこれまで雇用政策を持たされていなかった。府にしても100%持たされていただけではなかった。しかし今は経済政策と雇用創出課題が一体化しています。この時代、経済政策を構えようという時に、限られた市域だけの行政体ではもう無理だと思う。全般的な市町村連合や府市合併というのは先送りしてもいいから、経済政策の部分だけでも連携なり一体

化を図るべきだと思う。そういう例は外国にもありますし、我々もこれまで水道などでよく事務組合方式にしてきた。そういう経験を生かして実質的な統合化を何とか進められないかと考えます。

司会 どうもありがとうございました。もう一度盛大な拍手をお願いします。

4. 特別講演会レジュメ

『大阪:地域再生の途—発想を転換しよう』

講師 田口 芳明 大阪市大名誉教授・奈良産業大学教授

1. 開催日時 平成15年7月15日(火)午後3時～午後5時

2. 場 所 大阪産業創造館6F 会議室 E

3. プログラム

演題:「大阪:地域再生の途—発想を転換しよう」

講師:大阪市立大学名誉教授・奈良産業大学経済学部教授

田口 芳明氏

講師のプロフィール

【経歴】

1957年 神戸大学経済学部卒業
1962年 大阪市立大学経済学研究科博士課程終了
1962年 大阪市立大学経済研究所助手、以後講師、助教授を経て、
1981年 大阪市立大学経済研究所教授
1986～87年 大阪市立大学経済研究所長、
1995～99年 大阪府立産業開発研究所長など歴任。
現 在 大阪市立大学名誉教授ならびに奈良産業大学教授。

【活動内容】

大都市の将来に関心を抱き研究を続けている。大阪市総合計画審議会委員、大阪商工

大阪：地域再生の途－発想を転換しよう

大阪市立大学名誉教授・奈良産業大学教授

田口 芳明

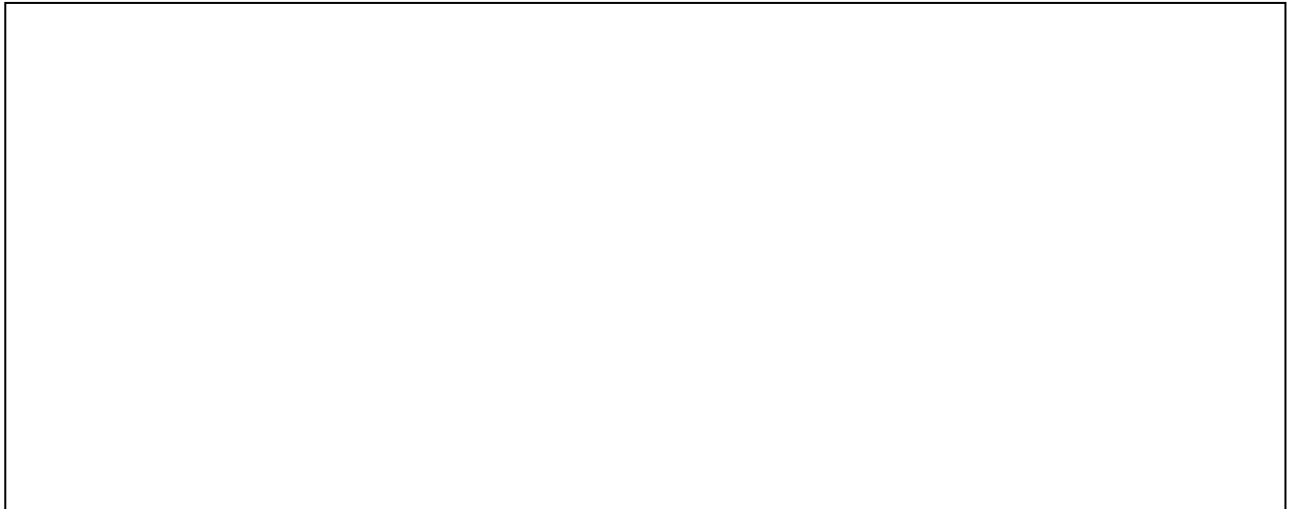
1. 成熟がもたらした大阪病

- 成熟化はどのように進んできたか
- 初老の体に鞭を当てた1960年代工業化
- オイルショックは分水嶺だった
- 80年代に味わった地方化の悲哀
- 三段底は人材枯渇と共にやってくるかも
- 素材型産業云々の議論はもはや古い
- ハイテク、ローテクの議論も古い
- 関西は「新産業群」と「社会的実験システム」のゆりかごに最適

2. 夢を与える都市大阪が持っていたソフト・インフラよふたたび

- 町の鉄工所はどのようにして生まれたか
- のれん分けに見る日本型。顧客ファイルを持って独立する欧米型
- 昔、実業学校が大阪の経済を支えた

- 大阪のうどん屋開業のサポートシステムと讃岐うどんの東上現象
- 育ちつつある新しい起業インフラ。あと10年がんばろう
- 大阪は面倒見の良さが身上。育ててモトとするシステムを
- 地域おこしは人づくりから。人づくりインフラは地域社会がベース



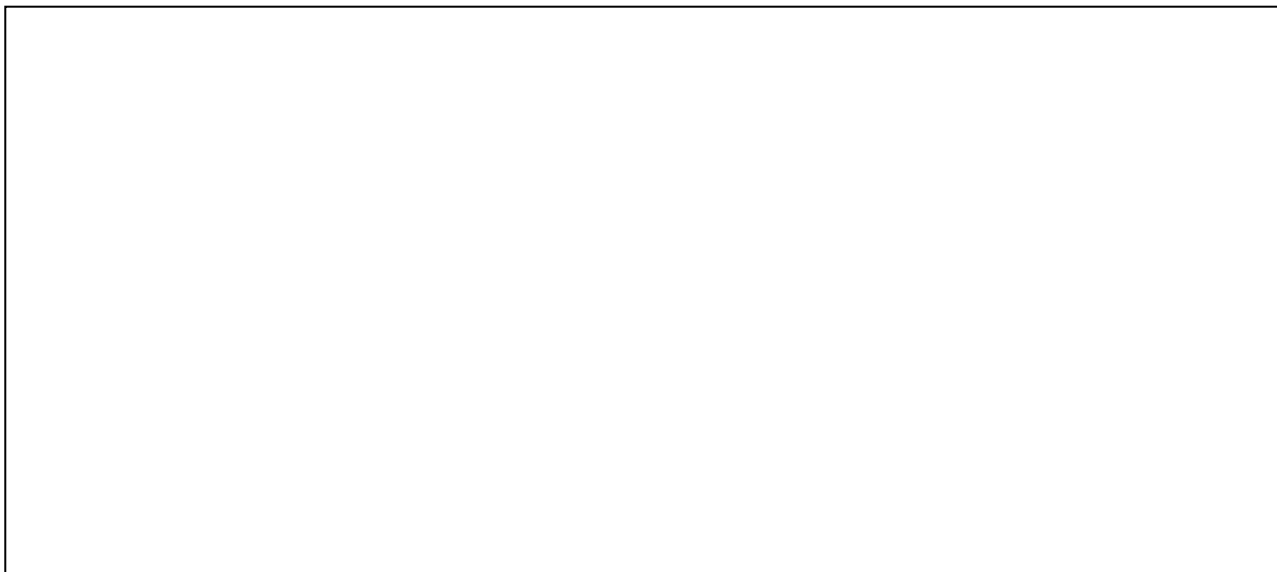
3. もう一度大阪経済をアジアが救う。更なる開国のすすめ

- ある個人的な回想
- いま大阪港がにぎわっている
- 輸出も減らない7大港中の優等生。アジア工業化のインパクト？
- 何故真っ先に関西の空洞化が起こったか。マイナスだけに終わらせないために
- 人でつながるアジアと関西。これぞアジア的スタイル
- 急を要するアジア人材の確保。2003年度通商白書と朝日新聞社説
- アジア地域の日本ブームを真剣に研究すべき。商機は無数に
- ダイワロイヤルホテルズと日本観光。豊富に揃え、豊富に見せる名所づくりを
- アジアと共に、国としてではなく都市として生きる覚悟を



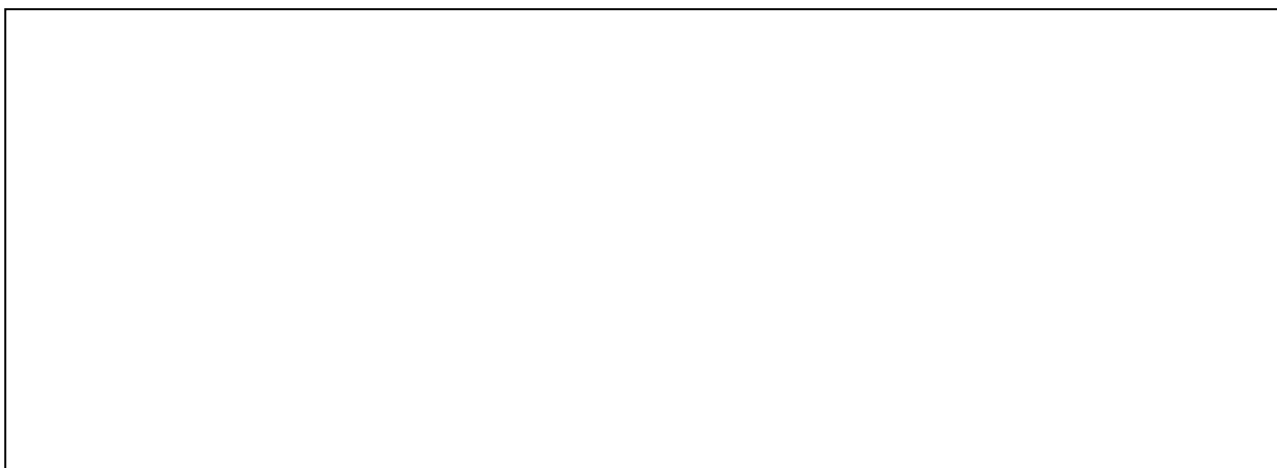
4. 都市の構造を多核心に組み替える時期が来た

- 梅田駅北地区コンペが示唆する次世代都心像。都市は何を創造出来るか
- 西部臨海はお荷物なのか夢の舞台なのか、迷走する西部臨海地区
- テクノポート大阪計画の「新都心」論の弱さ
- このままではコスモスクエアは西部臨海の中核にはなれない
- 「南北軸」「東西軸」の発想を超えて大阪市は多核心の都市としての発展を
- いま周辺区に新しい危機が。個性豊かで自立性を持った都市地域に戻るべきとき



5. おわりに

- 構造的課題を解決するうえで、我々はさまざまなストックに恵まれ、時間もある
- 緊急の課題は雇用と市場の創出。当面これに集中すべき
- そのためにも公・民の間の大膽な分担見直しと、府市の協力・一体化を急ぐべき



大阪：都市再生の途—発想を転換しよう

開催日：2003年7月15日

発行者：大阪都市経済調査会

大阪市中央区本町1-4-5

大阪産業創造館13階

TEL(06)6264-9815 FAX:(06)6264-9899